十文字学園女子大学人間生活学部紀要第11巻　2013年　研究ノート

保育者を目指す学生の障害観に関する研究
― 障害のある子どもとの出会いに関する調査から ―

Study on outlook on disability of the student to be a nursery teacher
－From research on encounter with children with disabilities－

鈴木　晴子
Haruko SUZUKI
潮谷　恵美
Emi SHIOTANI
権　明愛
Mingai QUAN
山田　陽子
Youko YAMADA

要　旨

本研究は、保育者養成校に在籍する学生の保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの出会い経験について、質問紙調査を用いた実態把握を行い、学生の障害のある子どもとの出会い経験の傾向について考察を行った。

回答者の傾向として、約８割が保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもと出会い、一緒に過ごした経験があることがわかった。また、学校生活における活動を通したかかわりが多いこともわかった。最も印象に残ったエピソードにおいて、少数ではあるが、障害のある子どもにかかわっていくなかでの変化について述べているものがあった。保育者養成校に在籍する前の学校現場における出会いは学生の障害観の形成に影響を与えている可能性が高いと推測できる。今後の継続的研究につながる示唆と課題が得られた。

１．問題提起と目的

1974年より障害児保育事業として保育所に保育士を加配する事業が実施され、障害のある子どもを受け入れる保育所は増加傾向にあり、2015年施行予定の「子ども・子育て新システム」においても障害児保育の充実を掲げている。

改訂された保育所保育指針（2008）[i] および幼稚園教育要領（2008）[ii] において、障害のある子どもに対する保育、障害のない子どもと障害のある子どもがともに育ち合うことについて指針が示された。その後、2009年の保育士養成課程等検討会中間まとめにおいて保育士養成カリキュ

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科
Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：保育者養成　大学生　障害のある子ども　出会い経験　障害観

ラムが見直され、科目「障害児保育」の単位増となっている。こういった障害児保育の充実が図られている中、遠藤ら（1997）[iii]は、保育者が保育現場において担当している障害のある子どもについての悩みを解決したいと願っていると報告した。このことから、保育者の卒後教育としても障害児保育に関わる内容について取り組む必要性があることがわかる。前嶋（2012）[iv]は「保育活動としての障害児保育を進める上で、保育者の障害理解教育は不可欠である」と述べており、保育者が障害に関する知識と理解をもつ必要性が高まっているといえるだろう。

大学生を対象とした障害児・者についての態度・障害観についての研究は、精神障害者との接触体験に焦点を当てた報告が多く、その他に、当事者（重度肢体不自由児、慢性疾患患者）の語りによる障害理解の取り組みの報告、ボランティア経験との関連性の報告（生川ら、1992）[v]や看護学生の障害観の報告（横山、2002）[vi]がある。また、海老沢ら（2000）[vii]は、四年制大学に在籍する学生を対象に中学時代までの障害児・者との接触経験について調査し、障害のある子どもや大人と出会う機会や障害について知る機会として、学校は大きな意味を持つと報告している。調査結果は、「自分の通っていた学校にいた」（80%）、「近所の人」（13%）、「友達」（11%）、「家族・親戚」（７%）であり、「自分の通っていた学校にいた」という回答のうち60%が「特別支援学級にいた」という回答であったと報告している。

次に、関谷（2012）[viii]は、保育士を目指す学生の障害観について研究し、障害についてのイメージはその人の経験や生きてきた歴史によって作られていると指摘している。学生たちの状況として、障害として捉える幅の狭さと知識不足について述べ、学生自身が障害について考えることが重要であることを述べている。これらの学生の保育者養成校入学前の経験と障害観のつながりについては明確な検証はされておらず、他の研究においても見当たらなかった。

そこで、筆者らは2012年から保育者を目指す学生の障害観の変容と障害児保育における専門性の構築過程についての検討を開始し、保育者を目指す学生の障害のある子どもとの出会い経験についての実態把握を行うこととした。

本論では、保育者養成校に在籍する学生の障害のある子どもとの出会い経験の実態を明らかにするために調査を行った結果を報告する。

２．方法

（１）調査対象者と手続き

四年制大学の保育者養成校に在籍する１年生から４年生487名を対象に、「障害のある子どもとの出会いに関する調査」を2013年１月に行った。１年生から３年生については授業内で調査用紙を配布し、４年生については一部の学生にのみ調査用紙を配布した。回収方法は、回収場所を学内に設置し、場所を周知した上で、回答者が各自で提出するものとした。

本調査は、１年生については縦断的研究および現状把握を行うことを目的としているため記名、２年生以上については現状把握を目的としているため無記名で回答を求めた。

回答者は69名であり、学年の内訳は１年生６名、２年生28名、３年生14名、４年生21名、有効回答率は14.2%であった。

（２）調査項目

本調査は質問紙調査である。「回答者の属性」「保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまで

の間の障害のある子どもとの出会いと一緒に過ごした経験」「保育所・幼稚園から高等学校卒業までの間で、最も印象に残った障害のある子どもとのエピソード記述」「障害児保育への関心」の４つの内容ごとに具体的な調査項目を作成した。

（３）分析方法

多肢選択法の項目については単純集計で分析を行った。自由回答法の項目についてはカテゴリー化し、分析を行った。

（４）倫理的配慮

本調査は、本学の研究倫理委員会の審査会（2012年12月21日付）により承認を得ている。調査用紙の配布時には、「障害のある子どもとの出会いに関する調査協力のお願い」を配布し、研究目的及び個人情報の取り扱い等についての口頭説明を行った。さらに、20歳未満にあたる者については回答者と保護者の協力同意を得た。調査すべての過程において、調査対象者の人権およびプライバシーの保護に配慮した。

３．結果

（１）保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの出会いと一緒に過ごした経験

①　保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの出会い経験の有無

保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの出会い経験について問うた。その結果、保育所・幼稚園から高等学校卒業までの間に障害のある子どもと「出会ったことがある」と回答した学生は56名（81%）、「出会ったことがない」と回答した学生は12名（17%）、「分からない」と回答した学生は１名（２%）であった。

回答者のうち約８割が保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもとの出会い経験があった。

②　保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの一緒に過ごした経験の有無

保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもとの出会い経験があると回答した56名に、障害のある子どもと一緒に過ごした時期を問うた。時期の内訳は、保育所・幼稚園19名、小学校44名、中学校27名、高等学校２名であった（図１）。

次に、学校生活において回答者が一緒に過ごした障害のある子どもの所属について問うた。その結果、小学校と中学校では「他のクラス」という回答が「自分と同じクラス」に比べて多く、高等学校は「他のクラス」のみの回答であった。一方、保育所・幼稚園では、障害のある子どもが「自分と同じクラス」という回答が、「他のクラス」という回答に比べて多かった（図２）。

（２）保育所・幼稚園から高等学校卒業までの間で、最も印象に残った障害のある子どもとのエピソード記述

エピソード記述の傾向として、保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもとの出会い経験があると回答した56名のうち、47名（84%）が保育所・幼稚園から高等学校卒業までの間にあった最も印象に残った障害のある子どもとのエピソード記述に回答し、１名（２%）が「特にかかわりなし」、８名（14%）が無記入であった。エピソードの記載があった

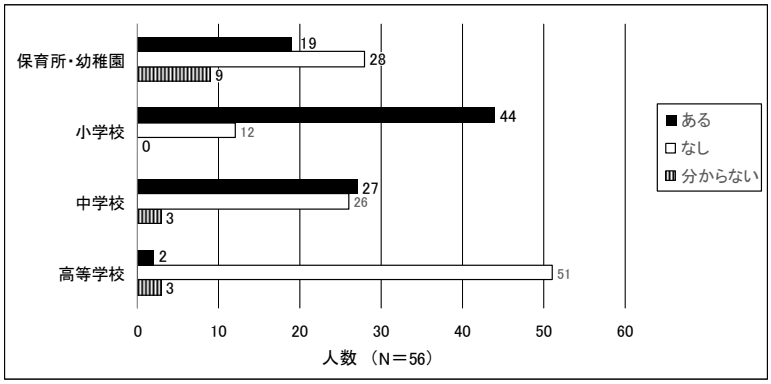

図１　時期別の障害のある子どもとの過ごした経験の有無

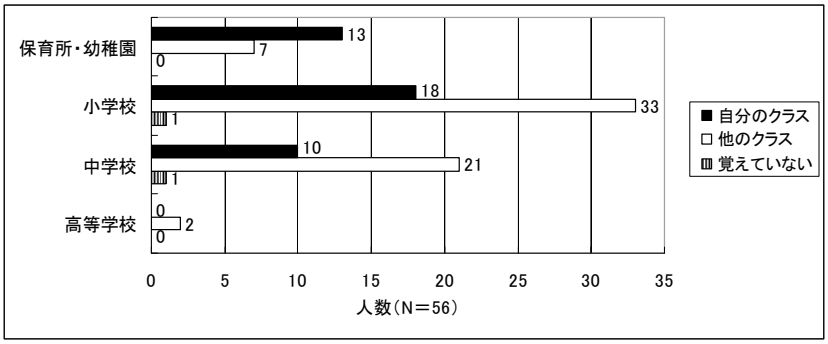

図２　時期別の一緒に過ごした障害のある子どもの所属（複数回答可）

47名の時期の内訳は、保育所･幼稚園６名、小学校34名、中学校７名、高等学校０名であった。

① エピソード記述にみられた場面

エピソード記述に回答した47名の中の40名（85%）が障害のある子どもとかかわった場面を具体的に挙げている。内訳は学校生活における活動場面が37名（79%）、学校生活以外の場面が３名（６%）であった（表１）。

表１　エピソード記述にみられた場面

エピソード記述にみられた場面と具体例	
学校生活における活動場面	
・学校行事	<例>運動会、修学旅行、遠足
・授業時間（保・幼：主活動）	<例>国語、制作の時間、職場体験学習
・給食・掃除の生活時間	<例>給食の時間、掃除の時間
・休み時間（保・幼：自由遊び）	<例>休み時間、自由遊び
・下校後	<例>放課後の校内
学校生活以外の場面	
・放課後児童クラブ	
・校外・園外の場面	

学校生活における活動場面についてみると、学校生活における学校行事、授業時間（保･幼：主活動）、給食・掃除の生活時間、休み時間（保・幼：自由遊び）の５つがみられた。次に、学校生活以外の場面としては、放課後児童クラブに通っているときのこと、街で会ったときのこと、住居が近く日常生活でのかかわりの３つがみられた。学校生活を通してかかわったり、一緒に過ごしている傾向がみられた。

② エピソード記述にみられた障害のある子どもに対する表現

エピソード記述に回答した47名の中の29名（62%）がエピソードで記述する障害のある子どもの表現として、具体的な障害名や障害のある子どもの所属や福祉器具の装着などを挙げている。内訳は、「障害」という表現、「ダウン症」など障害名、障害のある子どもの所属、障害のある子どもが装着している福祉器具、教師・保育者の助言の５つであった（表２）。

表２　エピソード記述にみられた障害のある子どもに対する表現

エピソード記述にみられた障害のある子どもに対する表現と具体例	
障害のある子どもに対する表現	
・「障害」	<例>障害、障害のある子ども
・障害名	<例>ダウン症、聴覚障害、肢体不自由
・障害のある子どもの所属	<例>特別支援学校、特別支援学級
・福祉器具の装着	<例>補装具をつけていた
補聴器をつけていた	
・教師・保育者の助言	<例>「自分の思ったことは伝えていいんだよ」

③ エピソード記述にみられたかかわり

エピソード記述にみられたかかわりとして、障害のある子どもと出会った場面や障害のある子どもに対する表現、一緒に過ごす中で楽しかったこと、驚いたこと、悩んだことなど様々な内容があった。障害のある子どもとのかかわりとその時の心情、障害のある子どもの言葉、行動や態度、教師・保育者のかかわる様子やかかわり方の助言を受けている様子がうかがえるものであった。こういった中で、かかわり続けることによる変化について47名の中の３名（６%）が記述していた（表３）。障害のある子どもと一緒に過ごす中で、かかわり続けることによって、障害のある子どもに対する態度や行動、コミュニケーションの方法などに変化が起こったことがうかがえる記載があった。

表３　かかわり続けることによる変化があったエピソード

時　期	具体的なエピソード
小学校	「修学旅行で同じ班になり、普段よりも多く関わる中で笑顔で話せるようになった。」
小学校	自分が小６の時、ダウン症の子が一年生で同じマンションに住んでいたため、一緒に登校していました。最初はうまく話せないので、コミュニケーションが取れなかったのですが、一緒に過ごすうちに何を言いたいのかが身振りなどでわかるようになったのがうれしかったです。
小学校	「運動会の時、障碍のある子どもと同じ連合になり、最初は嫌がっていた子どもも一緒に競技をしていくうちに仲良くなっていって、それ以降共に行動することが多くなった。」

（３）障害児保育への関心

障害のある子どもの保育への関心は、「大いに関心がある」21名（30%）、「関心がある」38名（55%）、「関心はあまりない」９名（13%）、「関心ない」０名（０%）、「分からない」１名（１%）

であった。「大いに関心がある」と「関心がある」を合わせると59名（約86%）が障害のある子どもの保育に関心があるという回答であった。

４．考察

保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間の障害のある子どもとの出会いと過ごした経験および障害児保育への関心についての回答を基に、以下に考察していく。

第一に、本調査の回答者の約８割が保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもとの出会い経験があるいうことである。エピソード記述においても、学校生活における場面を具体的に挙げて述べているものは多く、学校生活が障害のある子どもとの交流の機会となっていることが考えられる。本調査の回答者の障害のある子どもとの出会い経験は海老原ら（2000）の見解と一致しているといえるだろう。

また、本調査で得られた回答者の障害児保育への関心は、全体の85%は関心があるとし、少数ではあるが障害児保育に関心を示さない学生がいることがわかった。障害のある子どもとの出会い経験と障害児保育への関心の関連性はあるのだろうか。今回は相関については明かにできないため、今後の課題としたい。

第二に、エピソード記述にみられた障害のある子どもに関する表現である。障害のある子どもに対する表現として、障害のある子どもの所属や福祉器具の装着など客観的に目でとらえることができる範囲については具体的な表記をしている。また、具体的な障害名を表記していないが、「落ち着きがない」「言葉が遅い」など子どもの言語、行動や態度について発達障害の行動特徴を想定した障害の特徴として捉えられるような内容の記述をしている傾向がみられた。さらに、教師・保育者からかかわる様子やかかわり方の助言を受けている記述もあり、その子どもに応じた個別のかかわりを見る、聞く、経験することを手がかりに、その子どもを障害のある子どもと認識していることも考えられる。本調査では、最も印象に残ったエピソードの記述を求めており全ての出会い経験を対象としていないこと、「障害」という表現については具体的な記載を求めていないため詳細を明らかにすることはできない。引き続き、障害のある子どもとの出会い経験の実態調査を進めていき、保育所保育指針および幼稚園教育要領、前嶋(2012)[ix]でも障害理解教育の必要性について述べているように、本調査時における回答者の障害理解の程度とも関連させながら検証していきたい。

第三に、学校生活における障害のある子どもとのかかわりを回答者の多くが覚えていたという点に注目したい。関谷（2012）は「保育士を目指す学生の障害観に関して、障害についてのイメージはその人の経験や生きてきた歴史によって作られている」と述べており、強く印象に残っているということは、保育者養成校に在籍する前の学校現場における出会いは学生の障害観の形成に影響を与えている可能性が高いと推測できるのではないだろうか。また、障害のある子どもとの出会い経験においては、障害のある子どもと回答者自身のかかわりだけでなく、教師・保育者や友人など他者のかかわりもみているだろう。他者のかかわりをみて感じたことも障害観の形成に影響を与えることが考えられるのではないだろうか。この点は、縦断的研究の中で明らかにしていきたい。

第四に、最も印象に残った障害のある子どもとのエピソード記述において、障害のある子ど

もにかかわっていくなかでの変化について述べているものがあったことは興味深い。この回答者のエピソードの中には、かかわっていくなかでの変化の過程においてかかわったことによる困惑を経験しているものもあり、かかわっているときに困惑や葛藤、不快な気持ちを抱いていることも想定できる。生川ら（1991）や横山（2002）は障害児・者とかかわる経験を通して障害理解が変化していくことを述べており、本回答者も同様の経験をしている可能性があるだろう。

5．まとめ

本研究は、保育者の養成課程に在籍する学生の保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの障害のある子どもとの出会いに関する経験についての実態把握を行うことを目的とした。

回答者は、全体の８割が保育所・幼稚園から高等学校を卒業するまでの間に障害のある子どもと出会い、一緒に過ごしていた経験があった。

本調査はデータ数も少なく、更なるデータの収集が必要である。調査実施の時期及び方法の改善を図り、保育者養成校に在籍する学生の障害のある子どもとの出会い経験の実態把握と障害観の変容について検証を続けていきたい。さらに在学中における障害観の変容についても検証を進めていく予定である。本研究を通し、保育者の養成課程における障害理解教育に関する教育体制の見つめ、保育現場の充実へとつなげていきたい。

謝辞

本調査に協力してくださった回答者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

i　厚生労働省　2008　保育所保育指針、フレーベル館
ii　文部科学省　2008　幼稚園教育要領、フレーベル館
iii　遠藤敬子・徳田克己　1997　障害児担当保育者の研修におけるニーズについて、障害理解研究、2、49-58.
iv　前嶋 元　2013　障害児保育の授業を通した障害理解教育の意義と課題 ： 学生のレポート分析をもとに 、常盤短期大学研究紀要、41、73-81.
v　生川善雄・安河内幹　1992　精神薄弱児（者）に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究―福祉保育系女子大生の場合―、発達障害研究、13、4、302-309.
vi　横山孝子　2002　看護に求められる障害観―障害児への看護体験前・後の障害観の比較―、銀杏学園紀要、27、59-66.
vii　海老沢千冬・堀尾雅美・徳田克己・塙和明　2000　大学生が受けてきた障害理解教育の内容―学校における障害理解教育を中心に―、障害理解研究、4、１-10.
viii　関谷眞澄　2012　保育士を目指す学生の「障害」観に関する一考察-障害児保育にかかわる「保育者」として―、千葉敬愛短期大学紀要、35、１-10.
ix　前嶋 元　2013　障害児保育の授業を通した障害理解教育の意義と課題：学生のレポート分析をもとに、常盤短期大学研究紀要、41、73-81.

付記　本研究は、十文字学園女子大学人間生活学部共同研究費平成24年度助成を受けた。